

森のようちえんいっぽいっぽでの研修を終えて

研修が終わった今の私の中に残っている、様々な面での気づきや学びをまとめました。

1. 認める教育について

研修を受ける前は、「褒めない、叱らない教育」というふわっとした印象しかなく、実際何をしているのか、気持ちを認めるってどういうことなんだろうかと思っていた。研修を受けたことで、認める教育には明確な答えが用意されているわけではないこと、「認める」のやり方・表し方は人それぞれであること、それでもみんなが自分の気持ち・相手の気持ちの存在に気づき、耳を傾け、感じるという対人のやり取りが常に行われているのだということを知った。“教育”と呼んでいるけれど誰かが誰かに“教える”ことは別にしていない。元から子どもたちの中、スタッフの中にある主体がいろいろな形で交わりながら一緒に成長していく感じがした。

2. 認めるということについて

ここで言う「認める」という動詞の使い方として、大人が子どもを認める、というような主語と目的語の上下関係はなく、また全ての人が主語にも目的語にもなりうる。私が私を認める/私があなたを認める/あなたが私を認める/あなたがあなたを認める、これらを通して、それぞれの主体の存在を認識する。伝えなくても良いが感じておくことが大事。

3. 子どもとの関わりについて

今まで、子どもは可愛がる対象だった。基本的にどんな子どもも可愛いけれど、話を聞いてくれない子がいると純粋に可愛いとだけ思っているわけではない。でも、ここではそもそも子どもを可愛がろうという気持ちが先行していない。一緒に同じ場面や時間を過ごし、一緒に存在することが何よりも大事にされている。そして、子どもと上手くコミュニケーションが取れなかった時、それを子どもの問題として片すのではなく、今一度子どもや自分の気持ちに耳を傾け、見つめ直そうとしている。ここで内省（反省という意味ではなく、省みるという意味で）の時間があることが、子どもたちとスタッフの関係をよりフラットにしている気がする。

4. 子どもたちについて

子どもたちから言葉が出ず、態度で何かを表している時、大人はそこに気持ちがあると気付くかもしれないけれど、子どもたち自身はどれだけ自分の気持ちの存在に気付いているのだろうか。まず、心の中にあるこれは私・僕の気持ちだと感じられているのか。そして、自分の気持ちと他の子の気持ちがそれぞれあることをちゃんと認識しているのか。大人はそこを確認せずに、他人の気持ちを感じ取れなどと言ってしまうがちがな気がする。自分の心に、そして目の前の人の心に何かがある、と知っている、そこに思いを馳せる時間が生まれる。自然と、自分のことも目の前の人のことも見られるようになる。ここで出会った子どもたちは、彼らなりの方法でそれをやろうとしていた。すごいと思う。いい言葉が見つからないが、大人っぽいというか、子どもは思っているよりもちゃんと最初から1人の人間で、大人と何ら変わりはないのだと感じた。

5. 保護者の存在について

こんなにも保護者が主体的にスタッフや他の保護者と言葉を交わし、子どもの教育について考えている様子を初めて目にした。確かに、いっぴいっぴいにいる時だけではなく、お家にいる時も「認める」ことを家族みんなで続けていける方が良く、保護者もスタッフも似たようなことを試行錯誤して悩んでいるのなら共有できる仲間がいるのは心強い。それでも、難しく考えすぎたり、分かった気になってしまったり、大人同士で上手くやり取りができないこともある。結局は人対人のやり取りで、子ども同士、または子どもとのやり取りと同じ。

6. スタッフについて

子どもに対しても、保護者に対してもフラット。もちろんスタッフ同士も。何に対する話題でも同じトーンで話すし、思っていたよりいろんなことを話して聞き合っている。学生生活の延長線上にあるように思えた。たくさん考える。悩みを聞き合う。精一杯笑う、泣く。お互いを感じる。気持ちの良い関係性。

7. 森の育ち場のスタッフのみんなについて

アリー、かもにい、さーこ、きむ、えんちゃん、げんさん、全員タイプが全く違う。そして全員もれなくキャラが濃い。大変失礼ながら、この人たちもこんなに気持ちよく共存できるんだ、なんて思ってしまった。それが可能なのは、やはりみんなが「認める」をやろうとしているからなのだと思うと、「認める」ことの凄さを改めて実感する。

8. 活動場所について

“園舎のない”ようちえん、と言われると本当にどうやって過ごしているのか想像ができなかった。一応メインで活動している場所があって、その中での拠点はその日の気持ちによって変わる。結局は場所じゃなくて目の前の人との関わりに焦点を置いているように感じた。ただ、山田緑地も堀越キャンプ場もしょうがっこうのテントたちがある場所もすごく安心感があり、そして日々様々な変化があってそれを楽しめる場所だと思う。

9. スタッフとして子どもたちと一緒に活動してみても

こんなに自分の気持ちばかりを見ていいんだろうかと心配になるくらい自分の気持ちを感じて発した言葉や態度ほど、子どもたちにちゃんと伝わっていたのが不思議だった。本当に正直な気持ちこそがまっすぐ届く、言葉に表したら当たり前のように思えるけれど、実際、その時その時で移り変わっていく自分の気持ちに常に正直でいることは難しいし、そもそもそれを認識することも伝えることも簡単ではない。この試行錯誤の繰り返しのなのだと思うと途方のなさを感じたが、だからこそ面白いのだろうなとも思った。

10. 自分の気持ち・考えをたくさん見つめてみて

何でそうなるのかな？（疑問）→こうやったらどうなるんだろう、やってもいいのかな（はじめの一步）→今度はこうしてみたい！（次の一步）→上手くいったりいかなかったり→何で？、、この繰り返し。とにかく自分が色々なことを感じているのがいつもよりも分かったし、だからこそ感情が溢れてきた。自分の気持ちに気付いたなら、気付いたふり、分かったふりをしていたくない、その気持ちを正直に出したいと思った。

11. 研修について

- 見学・観察がたくさんできたのがとても良かった。そして、カメラでの撮影を禁止してもらっていたのがありがたかった。そのおかげで“今”目の前で起きていることに全集中でき、沢山のことに気づき、考えられたと思う。
- 毎日振り返りをしたのも良かった。頭の中が整理され、一日一日をちゃんと積み重ねていくことができた。
- 世間一般的にいうフィードバック、「今日はここが良かったね、ここはもっとこうした方がいいかもね」というものが無い。森の育ち場での研修にはこのスタイルが合っているよなと思う。質問をしたらそのスタッフさんの考えは共有してもらえるから、その上で自分がどう考え、行動するかは自分の気持ちを感じながら決める。
- 5日間の研修を選んで良かった。見る時間・実践する時間・考える時間もしっかり取れて、その上で長すぎないので中弛みすることなく最後まで続けられた。

改善して欲しいところがあるか考えてみましたが、びっくりするほど何も出てきませんでした。もう少し先にどんなことをやるのか、何があるのか教えてほしいと思う人はいるかもしれませんが、来て、観察して、気付いて、順応していく（ミーティングの感じ、挨拶の感じとか）、という子どもが入園する時と似た過程を辿る方が気づきが多く、面白い。

12. 研修を終えた今の私の気持ち

やりきったなあ、という気持ちです。一切後悔がない。“今”に一生懸命向き合ったという確かな感触が残っています。

昨日ホテルに戻った後、またしばらく涙が止まりませんでした。嬉しくて、寂しくて、無事に終わってちょっと安心して、みんなに認めてもらえているという実感があって心が温かかったです。ここで知ったこと、気付いたこと、出会った人たち、向き合ったことを忘れたくないと思いました。しばらくはこの5日間の余韻が抜けないかもしれない。

ただ、それが普段の生活に戻ることから目を背けたいという気持ちにつながることはないです。自分と向き合うことを5日間一生懸命やった後の私は、その前の私とはちょっと違いうだろうなという自負と、心強さがあります。また、森の育ち場に行ったらきっと素敵な経験ができる、と感じ取った自分の直感にさらに自信を持ってました。この先も、至福に従って（この使い方で合っていますか？あおちゃんママに教えてもらったんですがなかなか覚えられない、、、）生きていけば、きっと良い出会いと経験が待っている、と希望を持って前に進める気がします。

とにかく、森の育ち場を見つけたこと、ここに来てみんなと出会えたことを嬉しく思います。5日間ありがとうございました。